

小津映画と「美術工芸品考撰」 井手恵治氏インタビュー

伊藤弘了（聞き手・構成）

辻宜克（撮影）

戦後の小津映画には「美術」とは別に「美術工芸品考撰」という役職が存在する¹。彼らは映画に登場する食器、茶器、花器、絵画、掛け軸等の提供およびそれらの美術品に関するアドバイスを 행っていた。この役割を担ったのが銀座にある京焼きの専門店「東哉」の先代主人・山田隼生氏（1914～2001）であり、東哉で番頭をつとめた後、独立して赤坂で「貴多川」を営んだ美術商の北川靖記氏（本名は北川保、1926～2010）であった。その役割の重要性については、たとえば北川氏が書き残したいくつかの文章からわずかにうかがい知ることができるものの²、学術的な研究ではほとんど取り上げられてこなかった³。背景にちらりと映り込む小道具や絵画に至るまですべて本物にこだわったという話はいかにも小津的なエピソードとして広く人口に膾炙しているが、その小津の本物志向を支えるためになくはならない存在だった「美術工芸品考撰」の実態はあまり知られていないように思う。我々は、東哉で修行し、晩年に至るまで北川氏と交際のあった井手恵治氏（1936～）に当時の話をうかがう機会を得た。当日は、山田氏の次女で現在銀座のお店を引き継いでおられる東哉の松村晴代氏にも同席していただいた⁴。

¹ クレジットされる役職名は映画によって少しずつ異なる。たとえば『宗方姉妹』（1950年）、『麦秋』（1951年）、『お茶漬の味』（1952年）では「巧藝品考撰」、『彼岸花』では「美術巧芸品考撰」となっており、『小早川家の秋』では「美術品考撰」と「工芸品考撰」に分けられている。いずれにせよ、美術とは別にわざわざこのような役職名を作り出している点は注目に値する。

² 主要なものとしては、以下の三つの回想が挙げられる。①『小津安二郎・人と仕事』（井上和男編、蜚友社、1972年、285～287頁）所収のエッセイ。②『小津安二郎 新発見』（松竹編、講談社+α文庫、2002年、138～141頁）所収のインタビュー。③『東京人』（[特集「今こそ明かす 小津安二郎」生誕100年記念]、no. 195、2003年10月号、70～73頁）所収のインタビュー。

³ この分野の重要な先行研究に以下のものがある。岡田秀則「動く前に、止める——これからの小津安二郎論のために」、『NFC ニューズレター』112号（2013年12月-2014年1月号）、6～8頁。佐崎順昭「小津安二郎、絵画とデザイン、その拡がりに向けて（上）／（下）」、『NFC ニューズレター』（112号[2013年12月-2014年1月号]、9～11頁／113号[2014年2-3月号]、9～10頁）。これらは、東京国立博物館フィルムセンターで行われた展覧会「小津安二郎の肖像学」（2013年12月12日[木]～2014年3月30日[日]）と連動した論考である。この展覧会は松竹の美術監督・濱田辰雄の仕事にも焦点を合わせている。また、岡田、佐崎ともに論考のなかで北川氏に触れている。佐崎の論考の末尾には、小津映画に登場する絵画の作者と作品名のリストが掲げられており有用である。註12～15で挙げた作品名はすべてこのリストを参照したものである。なお、古賀重樹『1秒24コマの美 黒澤明・小津安二郎・溝口健二』（日本経済新聞出版社、2010年）には、古賀が北川氏とともに『秋日和』を鑑賞し、画面にあらわれる美術品を確認したことが書かれている（66頁）。

⁴ 松村氏が山田氏から伝え聞いた話によれば、小津にクレジットをどうするか問われた山田氏は、従来の「美術」では松竹のスタッフに悪いので、新たに「巧藝品考撰」という役職名を提案し、それが採用されたということである。

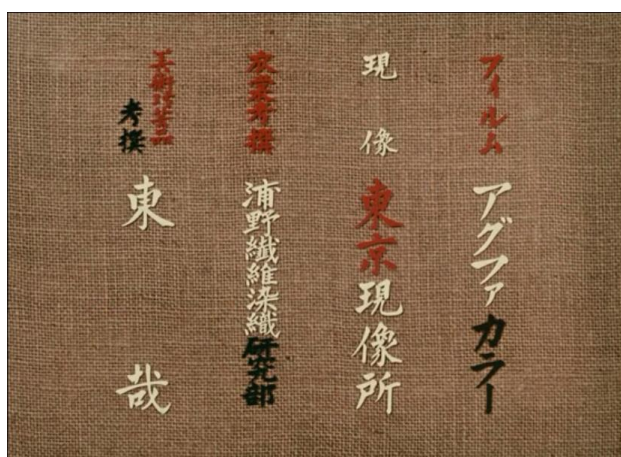
小津安二郎との出会い

——今日は東哉の先代主人である山田隼生氏、それから山田氏の元で修行した後、独立して貴多川を営まれた北川靖記氏と小津映画の関係について、お二人のもとでお仕事をされてきた井手さんにお話を伺いたと思います。

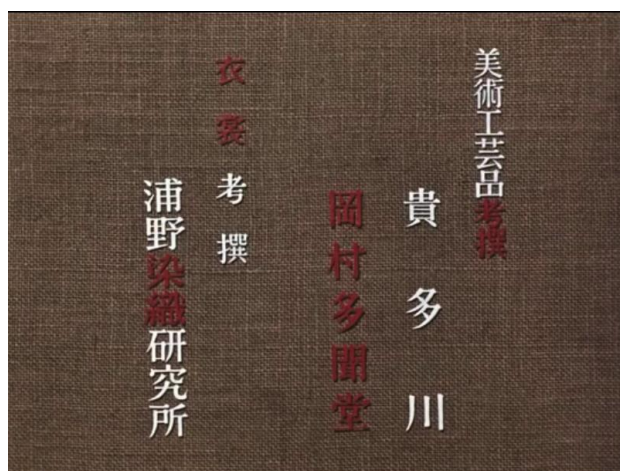
その前に、井手さんご自身と小津監督の関わりをお聞かせください。



井手恵治氏と松村晴代氏



『彼岸花』(1958年)のクレジット



『秋日和』(1960年)のクレジット

井手 私自身は、当時まだ修行中の小僧の身分でしたから、小津先生と直接言葉のやりとりをするような機会はほとんどありませんでした。ただ、小津先生との出会いは何か奇跡のようなものだったと、自分ではそう思っています。

はじめて小津先生にお会いしたのは、私が東哉に入ったまさにその日でした。昭和 28 (1953) 年 6 月のことで、私はそのとき 16 歳でした。生まれは愛媛県の今治で、東京に出てきた次の日の朝に、銀座にある東哉のお店に入りました。何のお店かも知らずに、ただただ銀座に憧れて出てきましたので、そのときは正直に言って「何か古くさいところに連れてこられたなあ」と思いましたね (笑)。当時の屋号は、東哉に変わる前の「陶哉」でした。

朝 10 時にお店に入って、そのあと 11 時 45 分頃に小津先生がお見えになったんです。お店のカウンターの後ろに畳が二枚敷いてあって、私がそこに座っていましたが、入り口の上に頭がつかえそうな大きな人が入ってきました。彫りが深くて色の浅黒い、肩幅の広い大男が。まっすぐ、何も言わないで私が座っている前に来て、椅子を表側に向けて動かすと、ドカッと腰を下ろしたんです。その大きさ、その威厳に、私は気がついたら膝が震えていました。「都会にはすごい人がいるなあ」と思いましたね。それから十分くらいしますと、表へ色んなタイプの顔立ちの男の人が一人、二人とやってきて、五人くらい集まりました。あとで気がついたのですが、カメラマンの厚田雄春⁵ さんとかね。美術の濱田辰雄⁶ さん、進行の清水富二⁷ さんといった方が、五人くらい集まってこられたんです。12 時に待ち合わせの約束があったんですね。それが『東京物語』のロケハンの日だったんです。もちろん、それはあとで知ったことですが。みなさんがお揃いになると「じゃ、行こうか」といって出ていかれました。

誰も小津安二郎なんて名前を口にしないし、その場ではわからないままだったんです。あとで私と同年のお店の見習いの人に「さっきの人、誰だか知ってるかい？」と訊かれて「いやー、知らない」と言ったら、「映画監督の小津安二郎だよ」と言われまして、大変驚きました。私はそのとき小津安二郎という名前だけは知っていたんです。というのも、田舎から出てくる前の年、つまり昭和 27 (1952) 年に『お茶漬の味』が話題になりましてね。映画は見えていないんですが、看板なんか「監督 小津安二郎」と出ているものですから、それが頭の中にありました。だけど、監督の写真を見たことがあるわけでもないし、どういう人かはまったく知らなかった。東京にはすごい人がいるもんだなあと思いましたね (笑)

⁵ 厚田雄春 (1905～95)。1922 年、松竹に入社。『淑女は何を忘れたか』(1937 年) の途中から『秋刀魚の味』(1962 年) まで、松竹で撮られた全ての小津作品でカメラを廻している。蓮實重彦との共著に『小津安二郎物語』(筑摩書房、1989 年) がある。

⁶ 濱田辰雄 (1907～1983)。1931 年、松竹蒲田の美術部に入社。美術を担当した映画は 200 本に及ぶ。小津映画では『母を恋はずや』(1934 年) から『秋刀魚の味』(1962 年) まで松竹で撮られた全作品の美術を担当した。

⁷ 清水富二 (1920～96)。『麦秋』(1951 年) から『秋日和』(1960 年) までの小津の松竹作品で製作主任 (進行) をつとめた。

小津と東哉、貴多川

——大変に運命的な出会いを果たされていたのですね。小津監督の日記を見ても 1953 年 6 月には『東京物語』のロケハンのためにしばしば東京に出てきていることが確認できます。また、東哉が東京での待ち合わせ場所になっていたことも、日記の記述からうかがえますね。

井手 それから、東京に出てこられたときに小津先生がいまどこにいらっしゃるか、東哉に問い合わせの連絡が来たときにはわかるようになっていました。

——東哉というお店について教えていただけますか。

井手 東哉はもともと京都で創窯された陶芸品のお店です。先代のおやじさん(山田隼生氏)が、昭和 6 (1931) 年に数えの 18 歳で京都から東京に出てきてね。日本橋の高島屋の裏に平安堂さんというお店があったんですが、そのすぐ裏に出張所というか事務所を構えたんです。そこから陶器の見本を持って花柳界を回って商売をしていました。五年間はそこで。昭和 11 (1936) 年の五月に、今の銀座八丁目の土地を手に入れて、そこに移りました。

——北川氏が東哉に入店されたのはいつ頃でしょうか。

井手 おそらく昭和 22 (1947) 年のおわりか 23 年のはじめでしょうね。北川さんは兵隊に行っておられました。行かれていた先は詳しくはわかりませんが、ロシア語をおしゃべりになるんですよ⁸。戦争中は軍隊で通訳をしていたそうです。終戦になってからか、あるいはその前に内地に帰ってきたようです。どうして東哉に入ったかは結局聞かずじまいになってしまいました。

——小津映画では昭和 25 (1950) 年公開の『宗方姉妹』から「澤村陶哉」(山田隼生氏のこと)のクレジットが確認できますが、小津監督と山田氏、北川氏がいつどのようにして知り合われたかご存知ですか。

井手 北川さんが小津先生と知り合ったのがおそらく昭和 23 (1948 年) 頃だと思います。当時、築地の本願寺の横をちょっと入ったところに「森栄」という待合がありました。おか

⁸ 『蓼科日記 抄』(小学館スクウェア、2013 年)には野田高梧の次の書き込みが残されている。日付は昭和 31 (1956) 年 11 月 1 日(木)。「晚餐中、北川君がロシア語に堪能なるを知り、一同呵然たるものあり」(135 頁)。また別の箇所では、やはり野田高梧が「北川君が曾て在満の当時、馬術に熟練せりといふは余等の全く意外とするところ。事実、その馬上の英姿はおのづから颯爽たるものあり」(89 頁)と書き付けており、戦争中、北川氏が大陸にいたことを示唆している。

みさんの名前がそのままお店の名前になっているのですが、ご承知のように森栄⁹さんは小津先生と馴染みのあった方です。小津先生が昭和 27 (1952) 年に北鎌倉へ引っ越された後、東京へ出られた際に、森さんのところにお泊まりになることも時々あったようです¹⁰。そのお店が開店するときに北川さんが食器を担当していると思うんですよ。おまけに、森さんのお店はご自身と、おそらくお手伝いの女性が二人くらいで、それだと物騒だから北川さんに泊まりに来て欲しいと頼まれたそうなんです。当時の北川さんは銀座の東哉のお店の二階に住み込みでしたから、夜に森さんのお店に行って泊まって、それから東哉に通っていたわけですね。それが縁で森さんが小津先生に北川さんを紹介したのだらうと思っています。これは直接ご本人たちから聞いたわけではないので私の推測ですけどね。

ですから、おそらく小津先生と北川さんが出会ったのが昭和 23 年 (1948 年) で、このとき北川さんは 25 歳前後だと思います。それで、二年後の『宗方姉妹』から東哉が映画のお手伝いをすることになります。知り合ってから一年ほどの間で、北川さんは小津先生に気に入られていったのでしょう。芸術家とのお付き合いに関して天才的なものをお持ちの方でしたから。北川さんのご出身が三重県の鳥羽で、小津先生は青春時代を三重の松阪で過ごしておられますから、そのことも関係していたかもしれません。

松村 父から聞いた話では、森栄さんのお店で使われている食器をご覧になった小津監督が「ぜひ東哉の主人に会わせて欲しい」とおっしゃったそうです。それで、会ったその日からすっかり意気投合して、映画のお手伝いを頼まれたと。

——映画のクレジットが途中で「澤村陶哉」から「東哉」に変わりますが、これは屋号の変更を受けたもので、担当しているのは同じ山田氏に変わらないということでしょうか。それから、『秋日和』(1960 年)からは「貴多川」に変わっていますね。

井手 そうです。昭和 32 (1957) 年に陶哉から東哉に屋号が変わりました。なぜかというのと、京都の澤村陶哉のお店と銀座のおやじさん(山田氏)のお店とは、それまで同じような商品を同じように売っていたのが、弟さんが京都の店を継がれるということで、昭和 32 年

⁹ それ以前には小田原で芸者をしていた。源氏名は「千丸」。小津と千丸をモデルとした短篇小説に武田麟太郎「雪もよい」(初出は『モダン日本』1939年2月号)、川崎長太郎「淡雪」(初出は『文藝』1979年5月号)などがある。千丸をめぐる小津と三角関係にあった川崎には「恋敵小津安二郎」(初出は『文藝春秋』秋の増刊号[1950年12月])というエッセイもある。これら三編はすべて『KAWADE 夢ムック 文藝別冊 小津安二郎』(河出書房新社、2001年)に再録されている。また、川崎が戦前・戦中に発表した「小津もの」と呼ばれる一連のモデル小説は『泡／裸木 川崎長太郎花街小説集』(講談社文芸文庫、2014年)にまとめて収められている。

¹⁰ たとえば小津の日記の1953年6月13日(土)の欄には「築地森にゆく……おそくなりたれば築地に泊す」(『全日記 小津安二郎』、393頁)とある。

に銀座のお店を株式会社にしてわかれたんです。そのときに屋号を東哉に変えました¹¹。ですから、『宗方姉妹』（1950年）から『早春』（1956年）までは澤村陶哉なんです。その次の『東京暮色』（1957年）と『彼岸花』（1958年）、この二作が東哉です。

その後、北川さんが昭和34（1959）年に東哉を退店して、独立されたんです。ですから『お早よう』（1959年）から『秋刀魚の味』（1962年）までの5本が貴多川ということになりますね。北川さんが独立されたのは昭和34年ですが、昭和28年（1953年）の6月に、赤坂に東哉の支店を出していて、北川さんはそちらを任されていました¹²。「洛趣音羽」という屋号でした。北川さんは前の月に結婚したばかりの新婚ですから、そこが二人の新居にもなりました。そのときの仲人が小津先生です¹³。それで、先生は独身ですから、料亭の灘万さんのお座敷に出ていた舞踊家の武原はん¹⁴さんという方と仮の夫婦になって仲人をされました。

画家との付き合い、岡村多聞堂、若松

——小津監督に画家たちを紹介したのも北川氏だそうですね。

井手 そうですね。小津先生は当時のトップクラスの画家ともお付き合いがありましたが、先生と絵描きさんたちを引き合わせたのは北川さんです。当時、銀座のお店に画家の先生がたが親しく出入りしていたんです。特に買い物用の用がなくとも、近くまで来たからといってお茶を飲んでいかれる方があったりしまして。なかでも山口蓬春¹⁵さんはしょっちゅう見えていたんですよ。山口蓬春さんと北川さんのお付き合いから、北川さんと画家の先生がたとの親交が始まっているわけです。それで小津先生と知り合われてからは、橋本明治¹⁶さん、東山魁夷¹⁷さん、杉山寧¹⁸さんといった画家を次々と紹介していったんですね¹⁹。

¹¹ 『全日記 小津安二郎』（田中眞澄編、フィルムアート社、1993年）の校異で、1959年6月22日（土）の日記にはじめて出てくる「東哉」の表記について「一行目の「東哉」は、「陶哉」の意。誤記と断定し難いのでママを振った」（823頁）とあるが、屋号が変更になった事情を把握していなかったものと考えられる。

¹² したがって、『蓼科日記 抄』の「北川君」の註に「昭和二十八年に独立」（160頁）とあるのは、厳密に言えば誤りである。

¹³ 1953（昭和28年）1月8日（木）の小津の日記には、北川氏の結婚に関する次のような記述が見られる。「陶哉の北川君から電話がかゝつて来る由〔……〕やがて陶哉主人と共にくる北川の結婚式の仲人をしてくれとの由」（『全日記 小津安二郎』、355頁）。

¹⁴ 武原はん（1903～1998）。昭和期に活躍した上方の日本舞踊家。1930年に美術評論家の青山二郎と結婚（1934年に離婚）。俳句を高浜虚子に師事。著書に『おはん』（創元社、1953年）、『のちの雪』（光風社書店、1978年）、『武原はん一代』（求竜堂、1996年）など。小津とは座談会で同席したこともある（「風俗と流行」『心』昭和29年6月号）。

¹⁵ 山口蓬春（1893～1971）。日本画家。「椿」「杯を捧げる埴輪」などが小津映画に登場する。

¹⁶ 橋本明治（1904～1991）。日本画家。『秋日和』では「ねずみ」「仏像」「デッサン 大同石仏」「鯛」「鶴」の少なくとも五点が使用されている。

¹⁷ 東山魁夷（1908～1999）。日本画家。『秋日和』に「門〔赤坂離宮〕」（1959年）が登場するが、

こうしてお知り合いになった画家の作品は映画のなかでも使われています。小津先生の映画では、ちらっと映る絵でも本物でなければなりませんでしたからね。美術品の出るシーンを撮る日には必ず北川さんが行っていると思います。新橋から大船までの回数券をいただくので、それで通っていました。絵画のなかには北川さんがお持ちだったものもありますし、岡村多聞堂（岡村辰雄）さんという額装の方からお借りしたものもありました²⁰。岡村さんは、日本ではじめて木ではなくてステンレスの額縁を作った方ですね。北川さんと岡村さんも親密なお付き合いがありました。

岡村多聞堂さんは、もとは新橋の烏森にお店があったんですが、赤坂の「若松」という料亭が閉店したとき、その跡地を買ってビルを建てています。その若松の女将さんが、映画に出てくる高橋豊子さんにそっくりの方なんです。イメージそのまま。それで小津映画に出てくる料亭の名前は若松なんです。

——たとえば『彼岸花』や『秋刀魚の味』の料亭、『秋日和』のトンカツ屋の名前が「若松」になっていますね。

そういった料理屋が舞台になっているシーンだとか、他にも大勢の人が画面に映っているような場面では、岡村さんご自身も出演していらっしゃいます。岡村さんは、何とか渋くて味のある方で、非常に自然に映っておられます。中村伸郎さんや佐分利信さん、北竜二さん、笠智衆さんたちが談笑している小料理屋のシーンなんかでお客様の役をやっておられますね。北川さんも三本か四本出ているはずですよ。

——それは、具体的にどの映画のどの場面かおわかりになりますか？

『小早川家の秋』の千草画廊で絵を見ているシーンの後ろ姿がそうですね。それから、『彼岸花』の冒頭の駅の場面で、画面の奥で笑っているのが北川さんです。

これは小津の私物であった。展覧会でこの作品を見て気に入った小津が購入に至る経緯は、小津の日記（『全日記 小津安二郎』）、北川氏と東山魁夷の回想（『小津安二郎・人と仕事』）を突き合わせることで浮かび上がってくる。『秋日和』のなかで「門」は原節子の背景に見えている。その役割については、佐崎順昭が「小津安二郎、絵画とデザイン、その拡がりに向けて（上）」のなかで分析している。

¹⁸ 杉山寧（1909～1993）。日本画家。小津映画には「仏像画」「デッサン 埴輪の鳥〔孔雀〕」「ギリシャの男子像」などが登場する。

¹⁹ そのほかに小津と交際があった画家として、北川氏は安井曾太郎（1888～1955）、高山辰雄（1912～2007）、加藤栄三（1906～1972）らの名前を挙げている（『小津安二郎 新発見』、138頁／『小津安二郎・人と仕事』、286頁）。

²⁰ 岡村多聞堂もいくつかの小津映画で「美術工芸品考撰」としてクレジットされている。先代主人の岡村辰雄氏の自伝に『如是多聞』（岡村多聞堂、1982年）があり、そのなかで小津との交遊についても回想している（228～235頁）。

——若松に限らず、小津監督はひいきのお店に通い続ける方だったようですね。日記を見ると同じお店の名前が頻繁に出てきます。

井手 ええ。たとえば、食べるものでは銀座七丁目にあった東興園²¹。間口の狭いお店で、なかにテーブルがいくつああって、十人は入らないだろうなというくらいの手狭なお店でした。残念ながら平成に入ってからお店が焼けてしまいましたね。それから、トンカツは上野の蓬萊。松坂屋の裏にあります。うなぎは千住の尾花、と決まっているんです。お召しになるものもそうでした。ワイシャツは横浜、洋服は赤坂。私も取りにいったことがあります。真冬でも真夏でもグレーのスーツしか着ませんが、夏と冬とでは色が少し違ってくるんです。夏は少し薄めで、冬になると濃いグレー。ワイシャツは胸のところにワンポイントでAUDZUのAを刺繍していました。



右側の男性が北川氏。左側が岡村氏。『小早川家の秋』(46分55秒)(DVD、東宝、2004年)。



画面中央で笑顔を見せているのが北川氏。『彼岸花』(3分10秒)(DVD、松竹、2013年)。

東哉・山田隼生氏の書き込み台本

——井手さんは小津映画の台本を江東区古石場文化センターに寄贈されていますが、その台本はどのようにして入手されたのでしょうか。

井手 全部で四冊寄贈していますが、一冊は東哉のおやじさんにもらったもので、あとの三

²¹ 東興園も小津の日記に頻繁にあらわれる。たとえば1953年5月30日(土)の日記に「陶哉 北川と東興園にゆく」(『全日記 小津安二郎』、389頁)とある。『蓼科日記』の註の解説によれば、『お茶漬の味』『東京物語』『早春』ではこの店の中華そばやシュウマイが使われているという(162頁)。

冊は北川さんだったと思います。それをずっと銀座のお店に置いておきました。昭和 37 (1962) 年に、東哉の建物をビルに立て替えるとき、お店の荷物を全部大工さんに預けたのですが、ちょっとしたトラブルがあって戻ってこなくなったんです。そのときに、持って行かれないようにと思って台本だけ持ち出しておいたのが残っていました。北川さんご自身は『宗方姉妹』から遺作の『秋刀魚の味』までの 12 本すべての台本をお持ちだったと思いますよ。

——表紙に「山田隼生様」と書かれた『彼岸花』の台本がありますが、鉛筆で京都弁の台詞を修正したあとが残っていることに驚きました。先代主人が京都のご出身だということで、道具類だけでなく、その影響が小津映画の台詞にまで及んでいた可能性があるわけですね。小津映画の書き込み台本や方言に関する先行研究が既にありますので、それらに続くものとして、今後詳しく分析していきたいと思っています。

松村 小津映画の京都弁は本当の京都弁という感じがありますね。一般的なイメージとしての京都弁ではなくて。

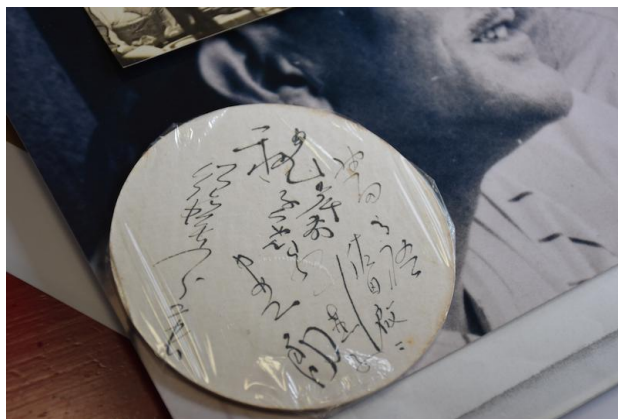
井手 北川さんからは色々なものをいただきました。たとえばこれ [写真 1] は小津先生の 50 歳のお誕生日会の際のものですね。それからこれ [写真 2] は岸恵子さんの誕生日会の際にコースターに寄せ書きしたものです。他にも小津先生に関する写真やものがいくつか残っていましたので、古石場文化センターに寄贈しております。

——小津監督と北川さんの間に非常に親しいお付き合いがあったことは、監督の日記に登場する頻度の多さからもうかがえます。くわえて『蓼科日記』にも北川さんのお名前がよく出てきますが、北川さんは蓼科にもよくいらっしゃったようですね。

井手 脚本を仕上げるまでに何ヶ月もこもるわけですからね。みんな交代で応援に行くわけです。蓼科通い用のリュックサックというのがありましてね。それに色んな食料やお土産を入れて、行かれる当番の方がしょっていくんですよ。北川さんも持って行きますし、佐田啓二さんもそうでした。北川さんが行くときに一度、私が佐田さんのお宅へそのリュックサックを取りに行ったことがありましたよ。リュックはそれ一つしかないんです (笑)



[写真1] 小津 50 歳の誕生日会の際に撮影されたもの。前列左から佐田啓二、高橋貞二、小津安二郎、笠智衆、北川靖記氏。



[写真2] 岸惠子誕生日会の際に出席者がサインしたコースター。「祝岸惠子ちゃん」とある左下に「安二郎」と書いてある。

井手 そういえば、一度小津先生からお電話をいただいたことがあります。私が風邪を引いて寝込んだときに、「けいちゃん、具合が悪いんだってな。気をつけなきゃいけないよ」とあの独特の口調でおっしゃっていました。電話越しでも受話器を持つ手が震えました(笑)。根がものすごく優しい方ですよ。私はその当時まだ修行中で、先生のような立場にある方がそういう小僧に直接口を聞くなんてことは考えられませんから。

お店に来たときにはけっこう冗談を言われるんですよ。それにこちらが応えなきゃいけないことはわかり切っているんですが、なかなかとっさには言葉が出てこない。こちらが応えないものだから、同じシャレを何度も言うんですよ(笑)。そういう方です。

2016年7月25日(月) 赤坂にて